



おのみ



令和4年度 6月号
志布志市立尾野見小学校

食の思い出

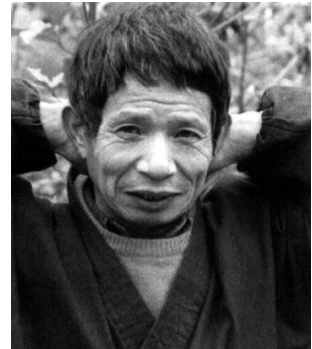
校長 宗岡 克英

先日、とある寿司屋で押し寿司を買いました。とても美味しくて価格も手頃ですよと教えていただいた店です。注文をして押し寿司が出来上がるのを待つ間、店内に置いてあったパンフレットを読むとこんなことが書いてありました。



『私は屋久島の出身で、幼い頃たまに大物の魚が入ると米を多めに炊いて母が寿司を握ってくれました。母が混ぜる酢飯を扇ぎ冷ますのが私の仕事でしたが、その時間は「これから美味しい寿司が食えるぞ」という待ち遠しい時間でもありました。ただ完成した料理を食べるだけでなく、炊き立ての米が酢飯になっていく香りや寿司になっていく過程を含め「食事」であると思えば本製品を制作しました。』

とても短い文章ですが、この文章の中にこの店のご主人が自分の作る押し寿司に込める思いが伝わっているような気がしました。ご主人に関心を持ちましたのでお寿司を受け取る際に話しかけてみました。屋久島では豊かな自然の中で、水を近くの川から引くなどして自然の恵みとともに暮らす生活をしていたそうです。そして、話していくうちにご主人のお父さんが詩人の山尾三省さんだということがわかりました。山尾三省さんは屋久島の豊かな自然の中で暮らしながら詩を書いていた方です。「全国からいろんな方が父を訪ねて来ました。」そう語るご主人の顔をあらためて見ると、その優しい眼差しやたまたまに詩人の面影が感じられました。



山尾 三省



家に帰り、買った押し寿司を食べてみました。お寿司を口に頬張るごとに、屋久島の山々や波打ち際の光景、そして寿司を握る母の姿がまぶたに浮かんできました。お寿司の一つ一つが詩のことばのように思えてきました。料理にはその土地の自然、つくる人の愛情、そしてその土地の文化すべてが込められている気がします。

6月は食育月間です。一緒に食事の支度をしたり、家族で食卓を囲み、目の前の料理について思い出を語り合ってみてはいかがでしょうか。

